

浪江町千年の歩み

ふるさと浪江を「今」
そして「未来」へつなぐ

歴史

一千有余年脈々と継承された想い

1 はじまり

古くは縄文時代から文明の形跡が残る浪江町。この地域にしか見られない独自の出土品や大規模な集落が多数あったことが証明されています。

成務天皇の御世に、足彦命（たらしひこのみこと）が染羽国造（しめはのくにのみやつこ）に任じられ、政治・文化の中心地であったことがうかがえます。

1159年頃には標葉氏の初代、標葉四郎隆義（しねはしろうたかよし）が浪江町請戸大平山にあたる場所に館を築き、一帯の統治を始めました。1323年頃から160年以上繰り返された相馬氏との抗争により、標葉の権現堂城が落城し、標葉氏の滅亡により相馬氏の統治下に置られました。

2 根付く防火意識

1859年、西からの強風にあおられた大火災が発生し、東西に細長い高野宿の街並み（権現堂地区）はほぼ全焼しました。

翌年、南北に長い新町通りの建設が、防火思想を結集して開始されました。

この経験を後世に受け継ぐための「裸参り」と呼ばれる火防祈禱祭が始まり、その伝統が継承されてきました。



2010年 裸参り



標葉郷野馬追祭



4世紀後半（古墳時代）
北中谷地遺跡

1978年	1976年	1953-1956年	1889年	1860年	1859年	1492年	1323年頃	1159年頃	古墳時代
大堀相馬焼が伝統的工芸品に指定	財政再建の苦難を乗り越え、地域開発と町民生活の向上	浪江町は請戸村・幾世橋村・大堀村・苅野村・津島村と合併し、現在の浪江町が誕生	浪江村・請戸村・幾世橋村・大堀村・苅野村・津島村の6か村が誕生	防火思想を集結した新町通りの建設がはじまる	権現堂地区「高野宿」が大火災に見舞われ、高野宿焼失	標葉の権現堂城が落城し、標葉氏は滅亡	相馬氏が行方郡に下向（相馬氏と標葉氏の抗争が始まる）	標葉四郎隆義が浪江町・大平山一帯の統治を開始	足彦命が染羽国造に任じられる

4 ふるさと浪江

3月13日、原発事故によって浪江町全域に避難指示を決定し、21,000人超の全町民が全国に散り散りとなりました。避難先を転々とし、辛く長い避難生活となりました。

2016年4月、帰還困難区域を除く有人ゲートおよびバリケードが撤去され、同年11月には準備宿泊が開始されました。

2017年3月31日、一部地域の避難指示が解除され、浪江町への帰還が始まりました。

5 受け継がれてきた浪江を未来に

浪江町は、数度の津波、標葉氏の滅亡、高野宿の大火災、そして、東日本大震災・原発事故を経験し、その都度、先人たちは決してあきらめることなく、何度も立ち上がり、汗を流し、浪江町の灯を大きくしてきました。

その灯を引き継いだ私たちは、より強く光り輝く灯を未来へつないでいきます。

1 大地震と津波の発生

2011年3月11日、14時46分、三陸沖を震源とした震度6強（M9.0）の大地震が発生しました。15時33分、津波第一波が到達し、最大で15mを超える津波の襲来により、浪江町は大きな被害を受けました。

2 原発事故の発生と放射性物質の拡散

3月12日～13日に発生した原発事故の影響により、大量の放射性物質が大気中に放出されました。

大気中ではもとより、周辺地域の山、川、海、そして、市街地に多くの影響を与え、この日を境に、私たちの日常が奪われました。

3 人的被害等

死者数は182人、震災による関連死は442人、全壊家屋651戸、約1,000の事業所が被災、沿岸部の6kmが浸水しました。

震災

全てがゼロになった日

5 地域開発と生活向上

1976－1985年、財政再建の苦難を乗り越え、交通網や文教施設の整備、下水道事業の推進、産業の振興が町民の生活向上につながりました。浪江町芸術文化団体連絡協議会が発足し、豊かな文化生活に浴する足掛かりとなりました。



6 活気あふれる浪江町

1986－1995年、町民の手づくりによる祭り「サマーフェスティバルインなみえ」の開催をきっかけに、町は大きく活気づきました。第1回ふくしま駅伝（町村の部）で優勝、浪江小ジュニアバレーボールクラブの県大会優勝、浪江高、浪江中、東中のソフトボール部が相次いで全国大会出場を決めるなど、スポーツ面での活躍も目覚ましい年でした。

7 新たなまちづくりの展開

1996－2010年、町のさらなる発展と町民サービスの一層の向上を図るため、役場庁舎を新築しました。常磐自動車道の延伸計画に伴う国道114号拡幅改良など幹線道路網の基盤整備をはじめ、電源開発との共生による産学官構想（企業・大学・研究機関の誘致）、請戸漁港を機軸にした活魚直売施設の新設など新たな町づくり、豊かな自然と調和した自立的な地域づくりの計画を進めました。



3 浪江町の誕生

1956年5月1日、浪江町は苅野村・大堀村・津島村と合併し、現在の浪江町が誕生しました。



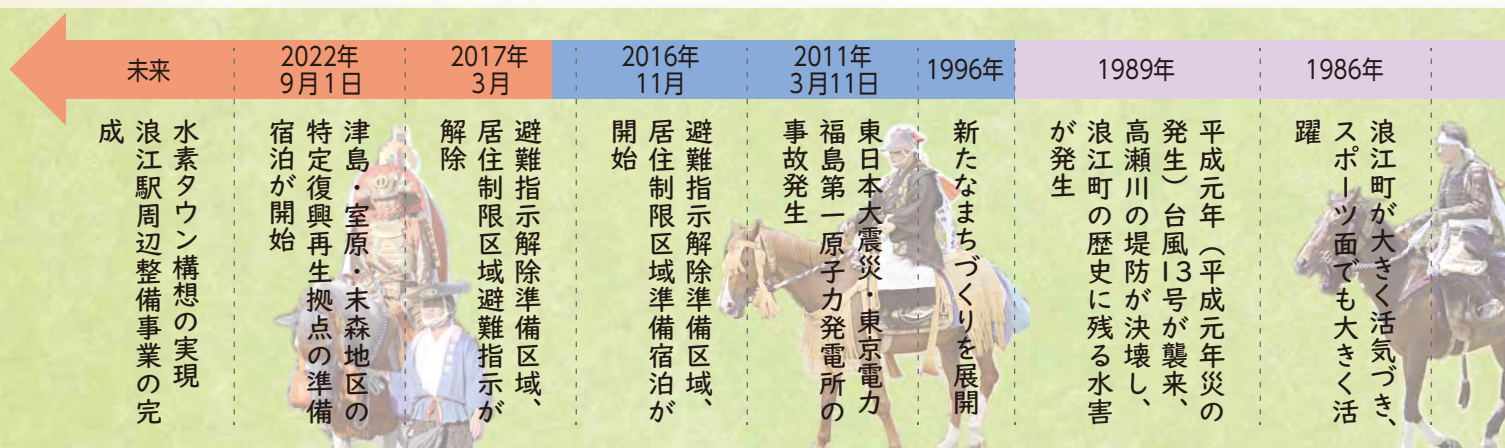
人口27,693人、4,807世帯でのスタートとなり、現在の浪江町の礎を築きました。

4 高度経済成長と町の基盤整備

1966－1975年、高度経済成長が続き、町の基盤整備が進む10年でした。



国道6号、114号の全面舗装完了、大柿ダムの建設決定、老人憩いの家やすらぎ荘の完成、双葉地方広域市町村圏組合発足など地域振興、人づくりの柱として町の核となる施設整備が進められました。



未来
未来へつなぐ

ふるさとの再生と創生へ

浪江町は、将来にわたり安心して暮らせる「持続可能なまちづくり」の実現を目指しています。

9月1日(木)、帰還困難区域である「津島・室原・末森地区」の特定復興再生拠点の準備宿泊が始まり、来春の避難指示解除を目標に、ふるさとへの帰還に向けて一歩を踏み出しました。

「水素タウン構想」を中心に復興する浪江町の未来をご紹介します。



記憶
震災から学び、
後世に伝える

記憶を風化させない

東日本大震災、原発事故による災害の教訓を後世の人々に伝承するため、「請戸小学校」を震災遺構として、整備・保存し一般公開しています。

震災遺構浪江町立請戸小学校は「地震、津波による被害に加え、原発事故により震災からそのままの形で残さざるをえなかった請戸小学校の今の姿をできるだけ変えずに残し伝える」ことを基本理念としています。

ふるさとの「今」を聴く



2011年3月11日に発生した東日本大震災と原発事故を受け、今も帰還困難区域となっている「津島・室原・末森地区」の特定復興再生拠点化は、来春の避難指示解除を目指して、準備宿泊を実施しています。

9月1日(木)、ふるさとへの帰還に向けて一步を踏み出した「津島・室原・末森地区」の皆さんの声を聴いてみましょう。



末森地区

自然と調和し、豊かな心を育む地

一度はあきらめかけたふるさと、
帰郷に向けた準備を――。

ふるさとで将来を考えられる
今は、新築工事が始まり、来年1月には家が完成する予定です。春の避難指示解除に合わせて、2月から準備宿泊を利用して、少しずつ荷物を移動していき、4月からはふるさとでの生活を新たに始めたいと思っています。今後は、畑を耕して自分たちが食べる分の農作物を育てて、育ってきたこの土地を守りたいという思いもあります。また、孫たちが帰って来られるような環境を作っていきたいと思っています。

今回の準備宿泊、立入規制緩和で、ふるさとに帰れるという実感ができて、早く帰りたいという気持ちが強くなっています。ふるさとに帰って来れるのはとても嬉しく、心が落ち着くのがわかります。周りはまだ、誰も帰ってきていないので、寂しいですが、私たちだけでも帰るという思いが強いです。



私たちの気持ちを大切に
ふるさとに戻りたいと考えていましたが、避難先での生活も長くなり、もう帰られないのかなと思っていました。

震災後、8回の引っ越しを伴う避難生活を送り、来年春の避難指示解除にあわせて、ふるさとへの帰郷を決意した。

古内 博之さん
保子さん

津島地区

先祖が開拓し、代々継承される地

津島に帰る将来像はまだ見えない――。

まずは、自分たちの家の掃除や草刈りから始めていますが、津島に帰れるという将来像はまだ見えていません。

先は見えないが、

できることから

大切だと考えています。

9月1日(木)からの立入規制緩和によって、自由に立入りできるようになったのは、とてもありがたい。だからといって、復興が完了したということではなく、地域社会が元に戻って、先人たちが築いたものを取り戻し、将来に伝えていくことで初めて復興に繋がると思っています。

そのためにも、若い世代が子供を連れて帰られるような地域にする必要があります、原発事故以前と同じ放射線量の環境に戻って、地域社会が帰って来られる環境になることが



草刈りで汗を流す今野さん

私たちが願う復興とは



震災後、5か所の避難先を転々とし、現在は大玉村に避難している。

明治20年頃に建てられた「旅館松本屋」を継ぎ、旅館業を営んでいた。

今野 秀則さん 芳子さん

室原地区

豊かな自然に囲まれた
山紫水明の地

父から受継いだ土地を未来に――。

私は室原で生まれ育ち、父から受け継いだ土地を、荒れた土地のままにはしておけない、その荒れた土地を見たくはないと思っています。体が元気に動く限りは、原発事故前の風景に近づけられるように、そして、将来戻ってくる人たちに故郷の土地を残せるように、頑張りたいと思っています。

ふるさとで暮らせる町を残したい

ふるさと、室原の空気はおいしく、戻って来れたという喜びはとても大きいですが、人が少なくなってしまう、寂しい思いもあります。2年前に亡くなった父は、室原に帰りたいという思いが強かったが、願いは叶いませんでした。

長かった12年の歳月



ふるさとの
美味しい空気を



震災後、家族でいわき市に避難し、浪江町の自宅では、トウガラシやカブなど野菜の試験栽培を行っている。

吉田 公明さん

構想

私たちの手で 浪江を「未来」へつなぐ

ふるさとの再生と創生へ

東日本大震災、原発事故による大きな被害を受けた浪江町は、将来にわたり安心して暮らせる『持続可能なまちづくり』の実現に取り組んでいます。

町民の帰還支援、移住定住施策や子育て支援策、働く場の確保に力を入れ、浪江町の復興が進んできました。

水素を利活用した水素エネルギー産業では世界をけん引し、「再生可能エネルギーの地産地消」を掲げる浪江町の復興にとって、水素はかせせないものとなりました。

そこで、水素とは何か、浪江町は水素をどのように利活用していくのかをご紹介します。

水素を身近に感じよう

水素ってなに？

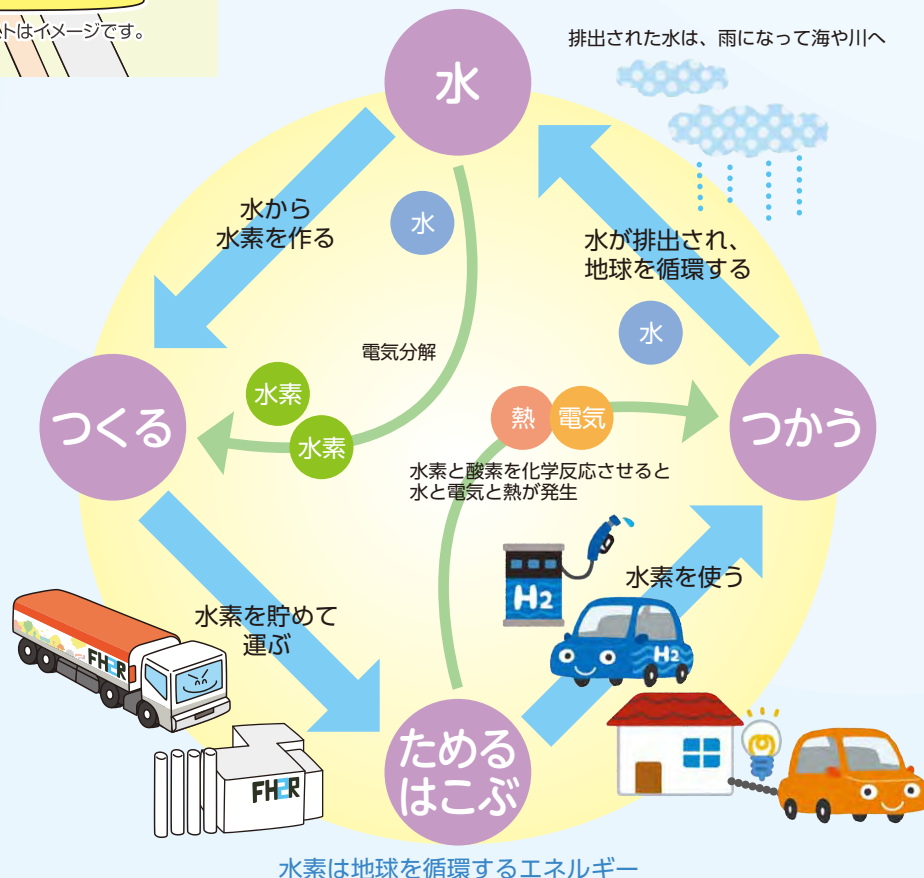
水素は「水の素」という意味で、酸素と結びついて水になります。

水素原子は宇宙で1番多い元素で、ほとんどの水素は水として存在しています。

地球にある水の量は、およそ14億km³といわれています。



※イラストはイメージです。



水素は地球を循環するエネルギー

どうして水素に注目したの？

水を電気分解することで水素が生成され、水素と酸素を化学反応させることで、水と電気と熱が発生します。使用する時に二酸化炭素を排出しない環境にやさしい水素エネルギーが世界で注目されています。

どうして水素は循環型再生エネルギーと呼ばれるの？

水素をエネルギーとして利用した際に、排出された水が蒸発し、雨になって海や川に還り、地球を循環します。

なみえ水素タウン

商業、工業、農業、水産業、交通、教育、福祉など、あらゆる分野が水素で繋がることで
水素社会とゼロカーボンシティを実現する！

EMSとは…
エネルギーマネジメントシステムの略。
水素の利用状況を把握することで、効率よく水素供給することができます。

商業、工業、農業、水産業、交通、教育、福祉など、あらゆる分野が水素で繋がることで

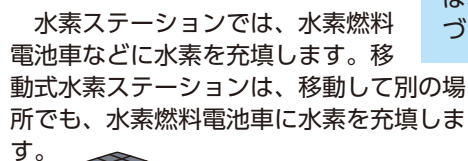
水素社会とゼロカーボンシティを実現する！

水素ツーリズム

エネルギーマネジメントシステムの略。
水素の利用状況を把握することで、効率よく水素供給することができます。

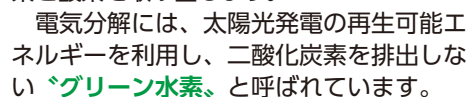
「今」を生きる私たち一人ひとりが、自分たちの手で浪江町を取り戻し、将来にわたり安心して暮らせる浪江町の実現に町民の皆さんで力を合わせていきましょう。

定置式水素燃料電池は道の駅なみえ、いこいの村なみえ、ふれあいセンターなみえに設置され、各施設に電力および熱を供給しています。



浪江駅周辺整備事業では、水素を活用したまちづくりを展開します。

FH2R（福島水素エネルギー研究フィールド）
で水を電気分解して、水素と酸素を取り出します。



水素 などで家庭に供給

家庭用燃料電池ではエネルギー生成時に発生する熱を利用し、電気と同時に湯を作ることができます。

生活に必要なエネルギーを効率よく、環境にやさしく作ることができます。

